

ヌエバ・エスパーニャの征服・ 植民地化における聖ヤコブ像

——「インディオ殺し」と「モーロ人殺し」をめぐる——

井 上 幸 孝*

はじめに

アステカ王国の征服（1519～21年）以降、スペインが支配を広げていったメキシコや中米各地¹⁾では、「魂の征服」が進められ、カトリシズムが定着していった。現在、現地でよく見かける聖人の一人が聖ヤコブ（大ヤコブ）である。聖ヤコブは、聖ミカエル（大天使ミカエル）、聖ヨハネ、聖母マリア、聖パウルスなどと並んで、町村や地区の名称、教会の守護聖人といった形で目にする存在である。

周知の通り、聖ヤコブはスペインと深い関わりを有する。9世紀前半に聖ヤコブの遺骸が「発見」され、その舞台となったガリシア地方のサンティアゴ・デ・コンポステラ（スペイン語でサンティアゴは聖ヤコブの意）は巡礼地として人気を集めていった。10世紀半ばにはイベリア半島のみならず、ピレネーの北からも巡礼者が来るようになり、11世紀末から13世紀にかけてはヨーロッパ各地からの巡礼が盛んになった（関 2019：83）。この過程では、聖ヤコブにまつわる歴史的な事績が人々の間に普及した。すなわち、イベリア半島で聖ヤコブが布教を行った際のカエサルアウグスタ（現サラゴサ）でのピラールの聖母の出現譚、イェルサレムでの死後に「石

* 専修大学国際コミュニケーション学部教授

の船」でイベリア半島へ遺体が移動した経緯、その際に様々な奇跡を目にした異教の女王ルパが改宗したという伝説、7世紀前半に始まったレコンキスタにおけるクラビホの聖ヤコブ出現譚などが人々の間に浸透し、スペインの守護聖人としての聖ヤコブ崇敬は広まった。サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼は16世紀には衰退へ向かっていたとされるものの、スペインの守護聖人としての聖ヤコブはその存在感を維持したものと思われる。例えば、アビラの聖女テレサをスペインの守護聖人にしようという機運が17世紀に高まったが、聖ヤコブ擁護派はその最大の抵抗勢力だった (Row 2011)。

スペイン独特の聖ヤコブ崇敬は、大航海時代における海外の征服・植民地化においてどのように現地に定着していったのだろうか。アメリカ大陸における聖ヤコブ崇敬を扱った研究書としては、バジェの『アメリカにおける聖ヤコブ』(1946年)やカルダイヤックの『使徒聖ヤコブ——二つの世界の聖人』(2002年)がある (Valle 1947; Cardaillac 2002)。さらにメキシコに関しては、ウェックマンやカンボスとカルダイヤックの研究がある (Weckmann 1994; Campos y Cardaillac 2007)。これらの研究のおかげで、聖ヤコブがメキシコやアメリカ大陸各地へと伝わったことの概要、聖ヤコブ顕現に関わる主要な史料についての情報、聖ヤコブ崇敬の現状に関する基本情報などはかなり整理されている。とはいえ、アメリカ大陸における聖ヤコブ崇敬の実態や普及の詳細な経緯に関する歴史研究の蓄積はまだまだ不足しており、特定の側面に着目した個別研究の積み重ねが必要な段階にある。

本稿では、中世スペインにおいて形成された「モーロ人殺し」の聖ヤコブ Santiago Matamoros がヌエバ・エスパーニャにおいてどのように定着したのか、あるいは、同地の征服・植民地化が進む中で「モーロ人殺し」はどの程度「インディオ殺し」の聖ヤコブ Santiago Mataíndios に姿を変えていったのかについて考察する。以下では、最初にメキシコの現状なら

びに「モーロ人殺し」と「インディオ殺し」の聖ヤコブのイメージについて概観する。その上で、これら2種類の聖ヤコブ像の定着や変容がどのような歴史的過程の中で進んだのかについて見る。具体的には、ヌエバ・エスパーニャの征服と植民地化の経緯における「インディオ殺し」の聖ヤコブ像、さらにはキリスト教布教の対象となった先住民側から見た「モーロ人殺し」の聖ヤコブ像について論じていくこととする。

1. 現代メキシコの聖ヤコブ

カンポスとカルダイヤックによれば、現代メキシコには聖ヤコブの名を持つ行政区や地区は、526か所存在し、現在の地名に残っていないものの歴史上確認されるものを加えると合計715か所に上る(Campos y Cardillac 2007: 179-196)。これらの場所では、聖人名は、しばしば先住民語の地名と組み合わせられて用いられている。歴史上、地名が変えられた場合や守護聖人が変更された場合もあるため、すべてに該当するわけではないが、ほとんどの場合、これらの地名は、スペイン植民地時代において既存の先住民語地名に守護聖人の名称を組み合わせることで形成されたものである。

実例からそうした地名の成り立ちを確認しておきたい。現メキシコ州のサンティアゴ・ティアングステンコ Santiago Tianguistenco は、聖ヤコブを意味するスペイン語のサンティアゴとナワトル語のティアンキステンコ（「市場の端」の意）の組み合わせである。他の聖人等の名称がつく地名も同様で、例えば、現在のメキシコ市トラルパン区のサン・ミゲル・トピレホ San Miguel Topilejo は、サン・ミゲル（スペイン語で「聖ミカエル」）とトピラン（ナワトル語で「権杖を持つ者の地」）の組み合わせに由来する。また、サンティアゴという名称ではないものの、現プエブラ州のイスカル・デ・マタモロス Izúcar de Matamoros の場合は、ナワトル語地名のイツォカン（「燧石の通り道」）とスペイン語で「モーロ人殺し」を意味す

るマタモロスが組み合わせされたものである²⁾。

多くの場合、聖ヤコブを守護聖人とする各地の教会に見られる聖人像は騎馬姿である。筆者は、メキシコ中央高原を中心に複数の町村で現地調査を行ってきたが、スペインでは比較的よく目にする巡礼者姿や布教をする使徒姿の聖ヤコブの表象はわずかしは見られなかった（図1・図2）³⁾。メキシコ各地の教会で見られる騎士姿の聖ヤコブ像は馬——圧倒的に白馬であることが多い——に跨っているが、その白馬の足下にはイスラーム教徒の頭部や全身像が見られることもしばしばである。つまり、こうした聖人像は基本的に「モーロ人殺し」である。教会内やファサードに見られるレリーフ、教会内に掲げられている絵画などにも同じく「モーロ人殺し」の聖ヤコブの姿が頻繁に表象されている（図3～図6）。また、現地調査の際には、「うちの村の聖ヤコブは使徒^{アポストル}ではない、モーロ人殺し^{マタモロス}だ」と村



図1：17世紀スペインの巡礼者聖ヤコブ像（スペイン、アストルガ、巡礼路博物館）。筆者撮影（2019年）。



図2：教会内の聖ヤコブ像（メキシコ州テキスキアク行政区サンティアゴ・テキスキアク）。筆者撮影（2019年）。



図3：教会内の聖ヤコブ像（メキシコ市ソチミルコ区サンティアゴ・テパルカトラルバン）。筆者撮影（2018年）。

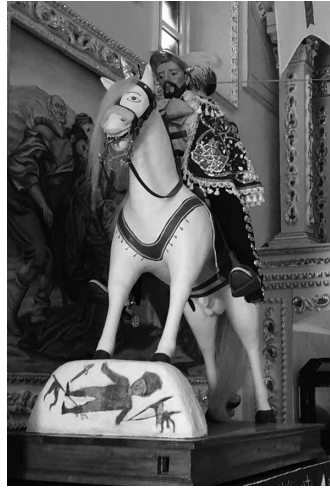


図4：教会内の聖ヤコブ像（メキシコ州サン・マルティン・デ・ラス・ピラミデス行政区サンティアゴ・テペティトラン）。筆者撮影（2019年）。



図5：教会内の聖ヤコブのレリーフ（オアハカ州サンティアゴ・ティラントンゴ行政区ティラントンゴ）。柳澤佐永子撮影（2019年）。



図6：教会入口の植民地時代のレリーフのレプリカ（グアナファト州グアナファト行政区マルフィル）。筆者撮影（2019年）。



図7：クラビホの戦いを描いた18世紀スペインの絵画（スペイン，サンティアゴ・デ・コンポステラ，巡礼博物館）。筆者撮影（2019年）。

人が誇らしげに語る姿も見受けられた⁴⁾。

「モーロ人殺し」の聖ヤコブ像は，844年（または834年），スペイン北西部，現在のラ・リオハ自治州に位置するクラビホにおいて，アストゥリアス王ラミーロ1世率いるキリスト教徒の軍が全滅の危機に瀕した際，白馬に乗った聖ヤコブが顕現し，敵のイスラーム教徒を殲滅させたという伝説に由来する（図7）。田辺によれば，この架空の戦闘の創作は，12世紀のイベリア半島北部のレオン・カスティーリャ，アラゴン，ナバラが関係する領土問題とも結びついてきた（田辺 2016）。15世紀末までレコンキスタが継続する中で，この「モーロ人殺し」の聖ヤコブ像は繰り返し利用され，表象されていった。

以上のように，「モーロ人殺し」の聖ヤコブ像は，中世イベリア半島独自の歴史的文脈，すなわちキリスト教徒とイスラーム教徒が対峙するレコンキスタという過程で登場し広まったものであった。戦闘で窮地に陥った

キリスト教徒を奇跡的に出現して救う騎士聖ヤコブというこうしたイメージは、スペインがアメリカ大陸の征服を進めた16世紀にも継承され、新たな敵であるアメリカ大陸先住民⁵⁾を打倒する「インディオ殺し」の聖ヤコブ像に変容していったと言われる。

メキシコから遠く離れた南米ペルーに目を向けると、「インディオ殺し」のイメージが絵画などに見受けられる（図8）。しかしながら、メキシコでは、明白に先住民が聖ヤコブの馬に踏みつけられる対象となっている図像はほとんど確認されていない。数少ない例の一つであるトラテロルコのサンティアゴ教会のレリーフは、「インディオ殺し」とされる（図9）。確かに、このレリーフの「インディオ」の姿は、典型的なモーロ人の特徴を備えてはいないが、明白にアステカ人とも言い切れない。一方で、メキシコ国内の様々な博物館や美術館に残されている植民地時代の聖ヤコブ表象は、これまで筆者が確認した限りではそのほとんどすべてが明らかに「モ



図8：「インディオ殺し」の聖ヤコブの19世紀ペルーの絵画（スペイン、サンティアゴ・デ・コンボステラ、巡礼博物館）。馬に踏みつけられている人物像はインカ人の姿をしている。筆者撮影（2019年）。



図9：植民地時代の聖ヤコブのレリーフ（メキシコ市クアウテモク区トラテロルコ、サンティアゴ教会）。筆者撮影（2018年）。



図10：17世紀メキシコの「モーロ人殺し」の聖ヤコブの絵画（メキシコ市グスタボ・A・マデロ区，グアダルーペの聖母教会博物館）。立岩礼子撮影（2019年）。



図11：17世紀メキシコの聖ヤコブのレリーフ（メキシコ市クアウテモク区，フ란ツ・マイヤー博物館）。筆者撮影（2019年）。



図12：18世紀メキシコの聖ヤコブ像（メキシコ州テポツォトラン行政区，国立副王領期博物館）。筆者撮影（2019年）。



図13：植民地時代メキシコの聖ヤコブ像（ゲレロ州アカプルコ市内，サン・ディエゴ要塞／アカプルコ歴史博物館）。左は全体像，右は別の角度から馬に踏みつけられた頭部を接写したもの。筆者撮影（2019年）。

ーロ人殺し」の図像である（図10～図13）。馬に踏みつけられている人物像や頭部がモーロ人を表象したものである場合，旧大陸風の兜やいかにもアラビア風の髭があることからそのことが確認される。

このように，現在のメキシコの教会の様子や現存する植民地時代の聖ヤコブ表象を見る限り，「インディオ殺し」よりも圧倒的に「モーロ人殺し」が優勢である。そこで，以下では，具体的に史料を紐解きながら，「インディオ殺し」と「モーロ人殺し」という2種類の聖ヤコブ像がスペイン植民地時代においてどのように人々の間に広まったのかについて考えてみたい。

2. ヌエバ・エスパーニャにおける「インディオ殺し」の聖ヤコブの普及

馬に跨った騎士姿の聖ヤコブが奇跡的に出現し、スペイン軍を救った最初の事例は、征服者エルナン・コルテス率いるスペイン人の一行がベラクルス上陸前に現タバスコ州のセントラ（シントラ）で同地の先住民と戦った際のことであったとされる。しかし、指揮官コルテスは、このセントラの戦いにおける聖ヤコブ出現に関する証言を残しておらず、この遠征隊の参加者が残した記録の中にそれを明言している史料は見当たらない⁶⁾。

それどころか、コルテス軍の一員であったベルナル・ディアス・デル・カステージョは聖ヤコブ顕現に懐疑的な記述を残している（ディーアス・デル・カステージョ 1986-1987：（一）122-123）。また、アステカ王国の征服過程における「悲しき夜」^{ノチュ・トリステ⁷⁾}の後に関しても聖ヤコブの奇跡的出現を示唆する史料があるものの、その場に居合わせた人物の証言は存在しない。つまるところ、別稿で詳細に検討したように、アステカ征服における聖ヤコブ顕現は、現場に居合わせた兵士たちの証言によるのではなく、征服後に様々な歴史記録が作成される中で生じ、繰り返し記述されていったと考えるのが妥当である（井上 2019）。そのきっかけとなったのは、コルテスの情報を用いて歴史書を書いたとされるロペス・デ・ゴマラの『インディアス全史 *Historia general de las Indias*』であった。彼の著作は1552年にサラゴサで出版され、まもなく出版差し止めとなったにもかかわらず、アメリカ大陸のスペイン植民地において流通し、読まれ続けた。

やがて16世紀後半以降に書かれたクロニカのいくつかには、アステカ征服の過程での聖ヤコブの奇跡的出現が「歴史的事実」として記されるようになる。ディエゴ・ドウランは「聖母とともに、栄えある守護者聖ヤコブも、トラテロルコの教会に描かれているように姿を現された」と述べ、ホセ・デ・アコスタは「ヌエバ・エスパニャでもピルーでも、エスパニャの

行なったいろいろな戦争で、敵のインディオが、白馬に乗って剣を手にし、エスパーニャ人のために戦うひとりの騎士を、空の上に見て」おり、「新大陸全体で、輝かしい使徒サンティアゴは、ひじょうな尊敬を受けている」と記している（Durán 1995：I, 645；アコスタ 1966：（下）455）。

こうしたクロニカの記述からは、対インディオの征服戦争において征服者を手助けする聖ヤコブというイメージがアメリカ大陸に渡ったスペイン人の間で根づいていた様子が窺われる。征服後に様々なクロニカが著されていく中で、「聖ヤコブによる加護」は、個々の史実の記述を超えた形で当然の「事実」として繰り返し書き記されるようになっていたものと思われる。

一方、アステカ王国の征服後、やがてヌエバ・エスパーニャ副王領の一部を成すことになる他地域の征服においても、聖ヤコブは登場する。1521年のテノチティラン陥落は、後のスペイン領のほんの一部の征服を意味するに過ぎなかった。それゆえ、スペイン人はメキシコ盆地から各方面へとさらなる征服活動を継続することとなった。ここでは、テノチティラン征服から間もない時期の2つの事例、すなわち、ヌエバ・エスパーニャが北側へ広がっていく過程でのケレタロ、および南方への遠征におけるグアテマラの事例について検討する。

まず、グアテマラの事例を見ることにする。テノチティランを攻略した後、コルテス率いるスペイン人征服者たちは南方への征服を企図した。後述するように、ペドロ・デ・アルバラードがメキシコ南部を経てグアテマラ方面へ遠征したほか、コルテス自身もイブエラス（現ホンジュラス）方面へ遠征を行っている。こうした中米方面への遠征の中、アルバラード一行によってグアテマラ高地に創設された拠点がサンティアゴと名づけられた。正式な町の名称は、サンティアゴ・デ・ロス・カバジェロス・デ・グアテマラ Santiago de los Caballeros de Guatemala であった。

同市の創設に至る歴史的経緯の概要は次の通りである。テノチティラ

ン陥落からおよそ2年後、1523年にペドロ・デ・アルバラード率いる大遠征隊が南方へ向けて出発した。アルバラードは、アステカ王国の征服においてコルテス麾下の主要なコンキスタドールであり、先住民からはトナティウ（ナワトル語で「太陽」の意）と呼ばれて恐れられていた。アルバラード一行は、現メキシコ南部のオアハカ（ワシヤカク）からソコヌスコ（ショコノチコ）を抜け、グアテマラ高地へと進軍した。翌1524年になるとキチュ人と戦闘を繰り返す一方、カクチケル人とは同盟関係を保った。その後、一行はエル・サルバドルへと進んだ後、カクチケル人の中心地イシムチェ Iximché⁸⁾へと戻り、同年7月に拠点となる町を創設した。

ドミニコ会士アントニオ・デ・レメサルが書いた『西方インディアスとりわけチアパとグアテマラ総督領の歴史』によると、このサンティアゴ・デ・ロス・カバジェロス・デ・グアテマラの町の創設の経緯は以下のようであった。

彼らは自分たちが持っていた目的に最もふさわしい場所だと考え、7月25日になるのを待った。その日は、栄えある使徒聖ヤコブの日で、彼らが創設する町、さらにはカトリック信者で敬虔なキリスト教徒としてそこに建設する寺院を、その日に合わせてこの聖人に捧げるためだった。こうして、彼らはこの聖人の好意と取りなしによって得た幾多の勝利に感謝をし、その名を冠することでこの聖人の防御と庇護の下に置こうとしたのである（Remesal 1988：I, 38）。

こうして町を創設し教会を建造した征服者たちは、「キリスト教徒として、騎士として、聖ヤコブの日を祝うことを誓った」という（Remesal 1988：I, 39）。

創設の数年後、アルバラードの不在中にこの町はカクチケル人からの攻撃を受けた。現場にいた彼の弟のホルヘ・デ・アルバラードは1527年11月に町を移動させた。この移転先が、グアテマラ総監領の中心都市となった

現在のアンティグア・グアテマラである。やがて植民地時代の後半になると、1773年の大地震でアンティグア・グアテマラは壊滅的な被害を受け、王令によりヌエバ・グアテマラ・デ・ラ・アスンシオンという新たな町が中心都市として1775～1778年に建設された。とはいえ、アンティグア・グアテマラの正式名称としては、その後もサンティアゴ・デ・ロス・カバジェロス・デ・グアテマラの名が維持された。

町の創設時に聖ヤコブが現れたという同時代の証言はないと思われるが、後世に書かれた歴史書には、当初の町の創設時に聖ヤコブが姿を現したとする記述が見られる。17世紀後半、グアテマラの地元有力者であったフランシスコ・アントニオ・デ・フエンテス・イ・グスマン⁹⁾は、以下のよう

〔市の紋章の〕上部は赤色で、スペインの守護者聖ヤコブが颯爽と馬に跨っている。その姿は逃げ惑うインディオの軍に襲いかかろうとするものである。その理由は、幾人かの歴史家たちが認めているように、町が聖ヤコブに捧げられたものであるというだけにとどまらない。いくつもの戦闘の機会に、とりわけ我らの軍が現在のメルカデーレス通りとなっている場所 […] を通って当市に入城しようとした時、目の前に現れたからである（Fuentes y Guzmán 1882：263）。¹⁰⁾

アルバラード一行による1524年のサンティアゴ・デ・ロス・カバジェロス・デ・グアテマラの町の創設時に聖ヤコブが出現したという「事実」は、こうした記述を通してグアテマラ市の住民に広まったのかもしれない。さらに、18世紀初頭に無名ドミニコ会士が執筆した『西方インディアスの歴史擁護序論』にも創設時の聖ヤコブ顕現の記述がある。この記録によれば、「現在のメルカデーレス通りで、指揮官P・デ・アルバラードは騎馬の従者の先に剣を振り上げた栄えある使徒聖ヤコブの姿を見た」とされ、アルバラードが部下にそのこと尋ねると彼らも同じ姿を見たと言ったという

(Anónimo 1935:200)。

以上のように、アルバラード一行によるグアテマラ市の創設は、わざわざ聖ヤコブの日に合わせてなされた。その背景には、それまでの戦いにおいて聖ヤコブの加護を受けたと考える征服者たちの信仰心があったと思われる。さらに、町の創設の現場に立ち会った者による直接的証言は見当たらないものの、後世の文書にはその際に聖ヤコブが出現したとする記述が見られ、17～18世紀のグアテマラのスペイン系住民の間ではそれが「歴史的事実」と見なされていたと推察される。

次に、メキシコ市（旧テノチティラン）よりも北側に位置するケレタロの事例を見ておきたい。テノチティラン陥落後、スペイン人は西方のミチョアカンへと支配を広げたが、北方への拡大には苦戦を強いられた。接触当時の先住民社会の状況を考慮すれば、このことは当然であった。アステカ王国やミチョアカン王国（タラスコ王国）¹¹⁾は、農耕・定住生活を基盤とするメソアメリカ文明の一部であったが、メキシコ市の北および北西方面については、オトミー人が居住する領域を越えると、スペイン征服直後の後古典期には既にメソアメリカ的な特徴を持つ農耕民が暮らす地域ではなくなっていた。狩猟採集を行う半定住もしくは非定住民が居住するこのような地域では、町などの確固たる拠点が存在し、そこを攻め落としで征服するという概念が必ずしも当てはまるわけではなかった¹²⁾。

こうした北側の地域で最初に最前線となったのは、現在のケレタロ州の州都サンティアゴ・デ・ケレタロ Santiago de Querétaro 市であった¹³⁾。複数の史料があるものの、この町の創設年は曖昧であり、そもそも創設者にも異説がある（García Ugarte 2010:53）。一説によれば、エルナンド・デ・タピアというオトミー系住民がケレタロの町を創設したとされる。元々この人物は先住民語ではコンニという名で、ノパラ在住の商人であった。1522～31年頃にラ・カニャーダに町を創設したが、キリスト教に改宗したのはそれよりも後の1541～45年頃だったと考えられる。そして1540年

代のある時点で上記の町を移転し、それがケレタロ市になったという。

他方、ニコラス・デ・サン・ルイス・モンタニェス Nicolás de San Luis Montañez なる人物がケレタロを創設したとする文書も存在する。この人物もまたスペイン人ではなくオトミー系の先住民で、トゥーラおよびヒロテペク（シロテペク）の王家の子孫だったという。彼は50人のカシーケ——その中には上述のエルナンド・デ・タピアも含まれていたとされる——を率いてチチメカ人を打倒したことがこの史料には記されている。そして、何よりも注目すべきは、このサン・ルイス・モンタニェスを創設者とする文書が聖ヤコブとの関係を明示していることである。

〔…〕これらの場所に集まってきていた2万5千を超える野蛮なチチメコ〔チチメカ〕のインディオを征服し、1年かけて我々はサンティアゴ・デ・ケレタロの町を創設し居住を進めることとなった。それは使徒聖ヤコブの日、すなわち1522年7月25日のことだった（Frias 1906：65）。

さらに、この史料はチチメカ人との戦闘の日に起きた奇跡にも言及している。

〔…〕こうして戦闘が終わった。この戦闘が行われ、この町を得たのは使徒聖ヤコブの日のことであつた。そして、その日、太陽が止まるという出来事が起きた。これは神がお許しになったことで、我々キリスト教徒は既に勝利を得ていたものの、神が使徒聖ヤコブを介して太陽を止めるというこの奇跡を起こされたのである〔…〕。また、この聖ヤコブの日である日曜日の朝、我々は戦闘を開始したが、その際にも聖ヤコブ、聖フランシスコ、そして聖母マリアが出現なさったのである〔…〕（Frias 1906：68）。

このように、アステカ征服後の他地域の征服の過程においても、聖ヤコ

ブはコンキスタドルを助けるために顕現した聖人として登場する。征服活動が聖ヤコブの助けによって成し遂げられるという考えは、征服者の間で広く信じられていたものと考えられる。加えて、そうしたコンキスタドルはスペイン人に限定されるものではないという点も重要である。ライトが指摘するところでは、ケレタロ創設に関わるサン・ルイス・モンタニェス関連の文書は後世に広められたものであるため、史実かどうかは安易に断定できない (Wright 2017: 17-30)¹⁴⁾。とはいえ、チチメカ人を撃退したオトミー先住民の指揮官もまた聖ヤコブの奇跡に立ち会ったと見なされていることは興味深い。少なくともこの文書の記述においては、スペイン人コンキスタドルのみならず、先住民コンキスタドル¹⁵⁾にも、インディオを打ち負かす聖ヤコブの庇護が届き得たと考えたことがわかる。

以上のグアテマラとケレタロの2つの事例に見られるように、アステカ王国の征服に続くヌエバ・エスパーニャの拡大過程においても、聖ヤコブは存在感を持ち続けた。グアテマラの事例からは、スペイン人の信仰心の篤さからわざわざ聖ヤコブの日を待って7月25日に町を創設するという経緯があり、しかも後世にはその場面に聖ヤコブの顕現があったとの記述も残された。加えて、ケレタロの事例では、聖ヤコブはスペイン人征服者のみならず、インディオ征服者にも与し、顕現することがあったと考えられた。すなわち、聖ヤコブは征服戦争において「スペイン人を助ける聖人」というよりも、インディオを含めた「征服者を助ける聖人」であったと表現することができるだろう。

3. ヌエバ・エスパーニャにおける「モーロ人殺し」の聖ヤコブの普及

先述の通り、現在のメキシコにはサンティアゴという地名を持つ、あるいは聖ヤコブを守護聖人とする町村や地区が数多く存在し、しかもそこで

見られるのは、主として「モーロ人殺し」の聖ヤコブ像である。400～500年という時間の経過を安易に飛躍することには問題があるにせよ、植民地支配が確立する中で、「インディオ殺し」よりも「モーロ人殺し」が優先される形で聖ヤコブ崇敬が先住民村落に根を張っていったという可能性は高い。そこで、以下では、植民地時代初期の先住民町村の再編、先住民のキリスト教化の実態について考えてみたい。

植民地時代の先住民町村の再編は、ヌエバ・エスパーニャではコングレガシオンと呼ばれることが多い。この集住化の政策は、16世紀半ばにその方針が示され、ヌエバ・エスパーニャ副王ルイス・デ・ベラスコ（ルイス・デ・ベラスコ父、在位1550～64年）統治期に着手されたことがわかっている¹⁶⁾。しかしながら、チチメカ戦争などの急を要する事態が生じたことから、ヌエバ・エスパーニャ副王領の各地でこの政策が大幅に進められたのは半世紀ほど後のことで、とりわけ1590～1615年の期間に集住化が大規模に実施された（Torre Villar 1995：25）。集住化政策が既存の先住民社会に与えた影響は、地域と場所により大きく異なっていたと考えられる。元の状態とはまったく異なる形で村や集落が再編されたケースもあれば、メキシコ盆地やその周辺に見られたように、アルテペトルやトラシラカリ¹⁷⁾が比較的そのままの形を保ちながら再編されるケースもあった。

集住化と前後する時期における最も大きな変化の一つは、キリスト教化によって町村の守護聖人が導入されたことであった。守護聖人の決定は、集住化に先立つ場合もあれば、行政再編と同時にあるいはその後ということもあったものと思われる。この経緯において、先述の通り、元々存在した地名に聖人名が付加され、「聖人名＋先住民語の地名（メキシコ盆地などではナワトル語の地名）」という形の町村や集落の名称が定まっていた。

テノチティトランの場合を具体例として挙げておきたい。旧テノチティトランの中心部はスペイン人の植民都市としてメキシコ市へと変貌した。しかし、それを取り囲む先住民の居住域はサン・フアン・テノチティトラ

ン San Juan Tenochtitlan という先住民の町として存続した。すなわち、聖域を囲むように存在していたテノチティトランのそれぞれの「地区」は、植民地時代になっても先住民の居住域であり続け、その境界線も先スペイン期のものが維持された。かつてのクエポパンは聖母マリアの名を冠したサンタ・マリア・クエポパン Santa María Cuepopan, ソキアパンは聖パウルスの名を伴ってサン・パブロ・ソキアパン San Pablo Zoquiapan, アツァコアルコは聖セバスティアヌスの名を伴ってサン・セバスティアン・アツァコアルコ San Sebastián Atzacotalco, モヨトランは聖ヨハネの名を戴くサン・フアン・モヨトラン San Juan Moyotlan となった。征服以前、これらの各地区には固有の守護神とその神殿があったが、そうした信仰の中心となる場所は、それぞれの守護聖人の教会に置き換えられた。

各地で守護聖人が決められていく中で、聖ヤコブも守護聖人として頻繁に選ばれるようになった。既に指摘されているように、聖ヤコブの名がついた町村や地区の分布には一定の偏りがある。その最たる例は、オアハカ州であろう。現在の同州は行政区（ムニシピオ）数が極端に多く、行政区名にもサンティアゴという名称が目立つ¹⁸⁾。だが、そうした特殊事情を考慮しても、オアハカ州にサンティアゴという地名が多いことは明白である。その理由は、概ね同州が植民地時代にドミニコ会の布教した地域であったことによると思われる。例えば、フランシスコ会の管区に比べると、ドミニコ会の管区となった場所にサンティアゴという地名が多いという傾向は確かに認められる。

植民地時代の修道会の管区によってサンティアゴの地名がより多く現れるという現象は、より局地的な観察からも見てとられる。例えば、現在の首都メキシコ市から北東方面、すなわちメキシコ州を越えてイダルゴ州へと向かう地域に目を向けると、メキシコ市近郊から遠ざかるにつれ、現在のメキシコ州からイダルゴ州にまたがる辺りから次第にサンティアゴという地名が目につくようになる。これは、かつてフランシスコ会の影響下に

あった地域からやがてアウグスティヌス会の管区だった地域に移っていくということに関係していると考えられる。

では、先住民村落で聖ヤコブ崇敬はどのように伝えられたのだろうか。この点に関する情報は少なく、さらなる史料の発見が待たれる。とはいえ、聖ヤコブへの数少ない言及の一つとして、16世紀のフランシスコ会士ベルナルディーノ・デ・サアグンが編んだ『キリスト教聖歌集 *Psalmodia christiana*』の記述が挙げられる。ナワトル語で編纂されたこれら聖歌のうち、聖ヤコブを扱っているものは4つの部分から成る。第1聖歌は以下のような内容である。

ディオス〔神〕から愛されるサンクティアゴ・アポストル〔使徒聖ヤコブ〕の名声は、露になり、広められ、遠くまで届くべきものである。

偉大なる戦士の所業と力は、知られ、聴かれ、称賛されるべきものである。

白いカワロ〔馬〕に跨った見事な姿、その素晴らしさは、見られ、人々の前で示されるべきものである。

彼の見事なエスパーダ〔剣〕は、我々の敵をなぎ倒し、切り裂く際にそれは大いに輝く。

立ちすくむモーロ〔モーロ人〕たち、トゥルコ〔トルコ人〕たちは大いに恐れをなし、彼の前から逃げ出し、馬から滑り落ちる。

身に纏った金、身に纏った鉄は、腕の飾りや翡翠とともに、光り輝き、余韻を残して行く (Sahagún 1999: 220-221)¹⁹⁾。

さらに第2聖歌には、「モーロ人殺し」に即した聖ヤコブの戦士としての側面が描写されている。具体的には、「偉大なる戦士サンクティアゴ〔聖ヤコブ〕」、「サンクティアゴ〔聖ヤコブ〕は我らが王イエススのカピタン〔指揮官〕となった」といった表現が見られる。第3聖歌にはスペインでの聖ヤコブの事績が含まれており、「我らが偉大なカピタン〔指揮官〕の

サンクティアゴ〔聖ヤコブ〕の役目は、かのエスパーニャ〔スペイン〕の地で悪魔と戦うことであった」として、イベリア半島での布教について触れられている。また、「ガリシアという場所で布教を始め」、「たくさんの奇跡を起こした」こと、さらには、「大貴婦人ドニャ・ロバ〔女王ドニャ・ルパ〕が信者となった」²⁰⁾ことも記されている。加えて、「かの地ガリシアには、彼の大教会がある」としてサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂の存在にも触れている（Sahagún 1999：222-223）。

最後に、第4聖歌では、メキシコに関わる内容が記されており、次のような文言が含まれている。

私たちヌエバ・エスパーニャの人間は、我らが偉大なるカピタン〔指揮官〕の教会に敬意を払うべきで、そこでは彼の遺骸が大事に保存されており、その場所はガリシア・サンクティアゴと呼ばれている。

とはいえ、我らの偉大なカピタン〔指揮官〕であるサンクティアゴは、我々の敵である悪魔と戦うためにここヌエバ・エスパーニャへやってきた（Sahagún 1999：222-223）。

サアグンの『キリスト教聖歌集』における聖ヤコブの聖歌の内容からは、次の2点を指摘することができる。まず、中世スペインの典型的な聖ヤコブのイメージが描写され、異教の女王ルパの改宗からレコンキスタにおけるイスラーム教徒（モーロ人）、さらには16世紀当時のオスマントルコという敵と戦う聖ヤコブ像が忠実に再現されている点である。次に、「インディオ殺し」に言及していない点にも注目する必要がある。キリスト教に改宗し、今まさにカトリックの信仰が根づこうとしている場所で「聖ヤコブがインディオを殲滅させる」という内容を示すことが意味をなさなかったことは明白であろう。布教される側である先住民の立場を考えれば、自分たちを倒しに来た聖人に敬意を払うはずなどない。それゆえ、聖ヤコブ

がヌエバ・エスパーニャにやってきた理由は「悪魔と戦うため」とされている。ナワトル語原文では、トラトラカテコロ *tlatlacateculu* すなわち「人間・梟」^[21]と戦うためとされているが、この語はフランシスコ会の布教初期に「悪魔」の訳語として宣教師たちが採用したものであった。

これ以外に具体的な史料は見つかっていないとはいえ、キリスト教化の経緯でスペイン人が導入し、先住民の間での聖ヤコブの普及に役立ったであろう他の媒体も想定しておくことが可能である。例えば、宗教劇はその一つと考えられる。ヌエバ・エスパーニャでは、宗教劇を含む様々な劇作が先住民語で制作され演じられたことがわかっている。メキシコ中央部のナワトル語圏のものに関しては、オルカシタスの古典的研究に加え、今世紀に入ってから米国で出版された『ナワトル演劇』にその実例が見られる（Horcasitas 2004；Sell and Burkhart 2004-2008）。しかしながら、聖ヤコブが登場する具体的な事例はほとんど収められておらず、現時点で指摘できるのは、「イエルサレムの破壊」に聖ヤコブが結びつけられていたと考え得るという点に過ぎない（Horcasitas 2004：I, 561-608；Sell and Burkhart 2004-2008：IV, 242-279；Harris 2000：132-147）。

さらに、植民地時代の先住民の間での聖ヤコブ崇敬の普及に役立ったと思われる媒体として、「モーロ人とキリスト教徒の踊り」についても検討する必要がある。この踊りは中世イベリア半島に由来し、1150年にバルセロナ伯ラモン・バランゲー4世とアラゴン王ラミーロ1世の娘ペトロニラの結婚式でモーロ人とキリスト教徒の戦いが演じられたのが最初に残る記録とされる（Domene Verdú 2015：38）。「モーロ人とキリスト教徒の踊り」は、現代スペインの祭礼にも残されているが、メキシコの先住民村落では様々なヴァリエーションを伴った踊りが現代に伝えられている。これまでの研究では文化人類学の立場から論じられることが多く、現代の事例については相応の研究の蓄積がある（黒田 1998；小林 1988-1990；Warman 1972）。これらの研究で扱われているものの中に、植民地時代に

さかのぼることのできる情報は少ない。とはいえ、上のサアグンの引用にも見られた同時代の「モーロ人」（オスマントルコ）との戦いというモチーフからも、16世紀当時にこの踊りの普及が進んだ可能性は大いに考えられる。今後の研究の進展次第では、「モーロ人殺し」の聖ヤコブ像が先住民村落で普及した過程を明らかにするための突破口の一つとなり得るテーマだと言える。

上述の通り、数百年の時間を超えて現代の先住民村落で見られる事象と植民地時代のキリスト教布教の状況を結びつけることには注意が必要である。しかしながら、史料の制約が大きい現状を考えると、聖ヤコブの普及の経緯を考えるヒントとして、現代において採録された伝承にも着目しておくのが有益であろう。

主に文化人類学者によって様々な聖人に関する伝承が20世紀および21世紀に採集されている。聖ヤコブに関しては、現代メキシコでカンボスが収集したものがまとめられ公刊されている（Campos Moreno 2007）。これらの話の中には、征服以前のメソアメリカの宗教概念と一致すると思われる点が随所に見られる。例えば、カンボスは次のように述べている。

民衆宗教においては、地上と天上の生活が並行したものとして捉えられる傾向がある。聖人たちは感情や熱情あるいは何らかの弱みを持っていると考えられている。例えば、サンティアゴ・クアシュテンコでは、教会のマヨルドモは次のように確信している。彼らの守護聖人は惚れっぽい性格で、「ラ・ウエラ」〔白人女〕を夜な夜な訪ねていく。それは近隣の共同体の金髪の聖母であり、ついでながら、その共同体の女性たちも金髪なのである（Campos Moreno 2007：53）。

さらに、カンボスは聖人が村にいたことになった理由についても以下の点を指摘している。

聖ヤコブに関する話のもう一つのトピックは、守護聖人像が「どのようにして共同体にたどり着いたか」を示すものである。こうした出来事については様々な伝承があるが、共通しているのは、聖ヤコブが現在いる場所に留まることを選択したという点である。換言すれば、彼の選択が気紛れではなく、自分でその共同体を選んだというものである（Campos Moreno 2007: 53）。

こうした「人間らしさ」を持ち合わせる聖人、自らの意思で居場所を決める聖人といったイメージは、征服前のメソアメリカ神話における多神教の神々の行動パターンに酷似している。加えて、「聖ヤコブは、人々に脅威を与える旱魃や飢饉、洪水や暴雨などにも関与する」というカンボスの指摘も、先スペイン期の神々の役割に沿うものと言えるだろう（Campos Moreno 2007: 57-58）²²⁾。当然ながら、こうした特徴は聖ヤコブに限ったことではなく、他の聖人についても同じように先スペイン期の神々を想起させる「行動様式」を残す伝承や説話は各地に見られる。

こうした征服前のメソアメリカの多神教の神々のカトリック聖人への置き換えが征服直後から見られたことを示す証言がある。先述のフランシスコ会士サアゲンは、16世紀後半の時点で、カトリック信仰の「偽装」に警鐘を鳴らしていた。当時のメキシコ市郊外のグアダルーペの聖母教会²³⁾について、彼は次のように記している。

山間部でも、厳かに生贄が行なわれ、遠路はるばる人々が巡礼に訪れた所が三ないし四か所ある。その一つは、ここメシコにあるテペアカクという丘で（…）、今では聖母グアダルーペと呼ばれている。この場所にはかつて、神々の母であるトナンツィン、つまり「我らが母」に献納された神殿があった。そこではこの女神を称えて多くの生贄が捧げられた。メキシコからも、二〇レグワ〔一レグワは約五、五キロ〕以上も離れた各地からでも、生贄のために人が集まり、数々の供え物を携えてきた。老若男女がこの祭礼に集まったのである。（…）今ではそこに聖

母グアダルーベ教会が建てられているが、説教師たちが神の母、聖母をトナンツインと呼ぶのをいいことに、彼らはその教会もトナンツインと呼んでいる。(…)はつきり分かっているのは、最初にこの名が付けられた時から、昔のトナンツインを意味していたことである。これは改めねばならないであろう。神の母、聖母マリアは正しくはトナンツインではなく、ディオス・イナンツインとなるからである。これは悪魔が発明したもので、トナンツインという誤った名の下に偶像崇拜を隠そうとしているように思われる。昔と変わらず今でも、遠く離れたところからこのトナンツインのもとへ巡礼に来るのであるが、この信仰もまた疑わしい。というのは、聖母〔を号とする〕教会はいたるところにあるにもかかわらず、そこには参拝せず、以前同様、遠方からもこのトナンツイン教会へやって来るからである(サアグン 1992: 162-163)²⁴⁾。

こう述べた後で、サアグンはさらに2か所について同様の「偽装」を指摘している。一つは、チアウテンパン(現トラスカラ州)の聖アンナ教会である。サアグンは、「我らが祖母」トシもしくはツァポトラン・テナンの生贄が行われる巡礼地だったことを指摘し、トナンツインの場合と同種のナワトル語表現の問題を指摘している。

彼らはトシを聖アンナと呼ぶが、それは聖アンナがイエズス・キリストの祖母であり、全キリスト教徒の祖母でもあるという説教に乗じたのである。これまでも、また今も、説教の際に聖アンナはトシ、つまり「我らが祖母」と呼ばれている。以前と変わりにトシの祭に来る人たちはみな、聖アンナにかこつけてやって来る。ところがトシという語は新旧どちらの意味にもとれるうえ、彼らは古いものを尊重することから、みなは新しいトシ〔聖アンナ〕ではなく、古いトシの参拝に来ていると思われる(サアグン 1992: 164)²⁵⁾。

さらにサアグンは3つめの場所としてポボカテペトル山麓のティアンギス

マナルコ（現プエブラ州）に触れ、聖ヨハネの名の下に異教の信仰を保持しているとしている。

ここでは、テルポチトリと呼ばれた神、テスカトリボカの大祭がかつて催された。彼らは説教師から福音者聖ヨハネ〔サン・フアン〕が童貞であったとの話を聞いた。そして、彼らの言葉で童貞をテルポチトリというので、それに便乗してテルポチトリの祭を昔と同じように行ない、サン・フアン・テルポチトリという名でごまかした。表向きの名はそうように装っても、昔のテルポチトリ、すなわちテスカトリボカの祭なのである（サアグン 1992：164-165）²⁶⁾。

このように、16世紀後半のサアグンの記述からは、先スペイン期の神々に属していた要素が新たに導入されたキリスト教の聖人に置き換えられるという現象がその当時から起きていたことが確認される。

現代の伝承に話を戻すと、上記のサアグンが挙げた事例と同じように聖人の姿を借りた先スペイン期の神々の属性と思しき内容が多い。とはいえ、各々の伝承の内容を安易に先スペイン期の宗教と結びつけることには慎重でなければならない。例えば、現代の聖ヤコブ伝承の中にはメシーカ人の守護神ウィツィロポチトリの誕生と結びつけられて論じられているものがある（Fagetti 2003；Campos Moreno 2007：141-142）。だが、この伝承が再録された場所はプエブラ州のサン・ミゲル・アクエスコマクである。この村は、スペイン征服直前にはアステカ王国によって征服された地域に属していたと思われるものの、直接的にはテノチティトラン固有の神であったウィツィロポチトリ信仰が根づいていた場所というわけではない。加えて、テノチティトランのメシーカ人によるウィツィロポチトリ誕生神話は、それまでのメソアメリカ神話の様々なモチーフを取り入れながら15世紀に練り上げられたものであった。換言すれば、直接的にメシーカ神話との連関を模索するよりも、より広範なメソアメリカ神話との関係を考え

ながら議論する方が生産的であると筆者には思われる。

こうした観点に立つ時、メキシコの歴史学者ロペス・アウスティンが提唱するメソアメリカの「固い核 *núcleo duro*」という概念から現代の「モーロ人とキリスト教徒の踊り」や伝承にアプローチすることは有用であろう。ロペス・アウスティンは、「固い核」を示す具体的諸側面を十分に明示しているわけではないが、メソアメリカの神話が征服以前から現代まで明白な連続性を持っていることをその研究で明らかにしてきた (López Austin 1996; ロペス・アウスティン 1993)。

先スペイン期の神々、とりわけ町村や地区の守護神がカトリックの守護聖人に置き換えられる中で、聖ヤコブも植民地時代を通じて定着していったと考えるのがおそらくは妥当であろう。キリスト教布教がなされた当時において、先住民側が問題なく聖ヤコブを受け入れるためには、クロニカや歴史書に登場する「インディオ殺し」ではない形でなければならなかった。サアグンの『キリスト教聖歌集』に見られたように、悪魔と戦う騎士というイメージは現実的な選択肢であった。そして、騎士姿の聖ヤコブを表象するのであれば、「インディオ殺し」ではなく「モーロ人殺し」が採択されるのは当然の帰結だったと想像される。こうした環境の下で、「モーロ人とキリスト教徒の踊り」や聖ヤコブが登場する宗教劇が受け入れられたとすれば、「モーロ人殺し」の聖ヤコブの受容が進んだのはきわめて自然な流れだったと言えるのではないだろうか。

4. 結論

本稿では、スペインからもたらされた聖ヤコブがどのようにヌエバ・エスパーニャにおいて普及したのかについて考察した。とりわけ「インディオ殺し」と「モーロ人殺し」それぞれの聖ヤコブ像の普及に関する歴史的経緯について見てきたが、結論として、以下の3点を指摘することができ

る。

まず、「インディオ殺し」の聖ヤコブの普及は、少なくともヌエバ・エスパーニャにおいては限定的だったという点である。スペイン人によるインディアス支配の最大の拠点となったメキシコ市に隣接するサンティアゴ・トラテロルコのように「インディオ殺し」とされる聖ヤコブ表象が存在するのも事実である。しかしながら、植民地時代の図像表現や現在の先住民村落の聖人表象では「モーロ人殺し」の聖ヤコブ像が優位で、「インディオ殺し」の聖ヤコブが登場するのは、スペイン人や先住民の征服者側の立場での歴史的記述が主であった。

次に、ヌエバ・エスパーニャの先住民村落における「モーロ人殺し」の聖ヤコブ崇敬については、スペイン人のクロニカや征服者とその子孫の記録に書き残された歴史的記憶とは別のものがその定着・普及に寄与したと考えられる点である。具体的には、集住化政策に伴うキリスト布教と守護聖人の決定、キリスト教布教の際に用いられた聖歌や演劇などの媒体を通じた流布、さらには「モーロ人とキリスト教徒の踊り」の導入といった歴史の経緯がこうした要素のいくつかであったと思われる。

最後に、先住民側がどのようにして外来の聖人を受け入れたかにも注目する必要がある点を指摘しておきたい。従来の研究では、「スペインからもたらされた聖人がどう定着したか」、「スペイン人はいかにカトリシズムを定着させたか」といった見方でこの問題が捉えられることが多かった。換言すれば、スペイン人が行為の主体であり、メソアメリカ先住民はその「受け手」と見なされがちであった。しかしながら、本稿で部分的ながら論じたように、その「受け手」側の文化的な背景を考慮に入れ、彼らがいかにして外来の聖人崇敬を受容し、征服以前の宗教概念や改宗前に信仰していた守護神の特徴と重ね合わせながらその聖人を変容させていったのかという観点に立った考察を今後いっそう進めていく必要がある。こうした観点に立つ時、主に文化人類学者によって積み重ねられた現代に関する研

究の蓄積を、植民地時代を対象とする歴史学とどう結びつけていくかが課題となるだろう。

謝辞 本論文は、JSPS 科研費（基盤研究（C））「スペインとメキシコにおける聖ヤコブ信仰の継続と変容の統合的分析」（JP17K02037）の助成を受けた研究成果の一部である。なお、図版として掲載した写真を提供いただいた立岩礼子氏、柳澤佐永子氏に感謝申し上げる。

注

- 1) 現在はグアテマラなどの中米諸国とメキシコは国境で隔てられているが、そもそもメソアメリカ文明圏としては連続した地域であった。本稿では、メソアメリカ文明の領域に加え、その北側の非メソアメリカ地域も併せて、当時の副王領の名称であったヌエバ・エスパーニャと表記する。
- 2) ナワトル語の地名がスペイン語に取り入れられた結果、時として原形をとどめないほど変化していることがある。本論の趣旨から逸れるため詳細には触れないが、クアウナワク（Cuauhnáhuac）がクエルナバカ（Cuernavaca）となったのもその一例である。
- 3) 本研究を開始した2017年4月以降、2019年までに訪れたのは、以下の町村や地区である。トラテロルコ（メキシコ市クアウテモク区）、サンティアゴ・テバルカトラルパン（メキシコ市ソチミルコ区）、サンティアゴ・トゥルイエワルコ（メキシコ市ソチミルコ区）、サンティアゴ・サボティトラン（メキシコ市トラワク区）、サンティアゴ・テポブラ（メキシコ州テナンゴ・デル・アイレ行政区）、サンティアゴ・ティアングステンコ・デ・ガレアナ（メキシコ州ティアングステンコ行政区）、サンティアゴ・ティラバ（メキシコ州ティアングステンコ行政区）、サンティアゴ・アトラトンゴ（メキシコ州テオティワカン行政区）、サンティアゴ・テベティトラン（メキシコ州サン・マルティン・デ・ラス・ピラミデス行政区）、サンティアゴ・トルマン（メキシコ州オトゥンパ行政区）、サンティアゴ・サクアルカ（メキシコ州テオティワカン行政区）、サンティアゴ・テヤワルコ（メキシコ州トゥルテペク行政区）、サンティアゴ・テキスキアク（メキシコ州テキスキアク行政区）、アトトニルコ・デ・トゥーラ（イダルゴ州アトトニルコ・デ・トゥーラ行政区）、サンティアゴ・テペヤワルコ（イダルゴ州センポアラ行政区）、マルフィル（グアナフアト州グアナフアト行政区）、シラオ・デ・ラ・ビクトリア（グアナフアト州シラオ行政区）。
- 4) 2019年5月、サンティアゴ・サクアルカ（メキシコ州テオティワカン行政区）の教会の番人をしていた村の住民からの聞き取りによる。
- 5) 南北アメリカ大陸の先住民はきわめて多様で、別個の文明であるアンデス文明とメソアメリカ文明のみならず、それ以外の諸民族の様々な文化が存在したが、スペイン

人をはじめ当時の西欧人はそれらの人々を「インディオ」と総称した。

- 6) ベルナルディーノ・バスケス・デ・タピアの報告書のように、「偉大なる奇跡」に言及し、「白馬に乗った人物」が見られたと記述している史料もある。しかし、その人物が聖ヤコブだったか否かどころか、聖人だったかどうかすら言及されていない (Vázquez de Tapia 1973 : 29)。
- 7) 1520年6月30日～7月1日の戦闘を指す。メシカ人との緊張の高まりからコルテス軍はテノチティトランからの脱出を試みたが、激しい戦いに発展した。部下の約半数を失ったコルテスが大木の下で涙を流した挿話が残されたため、征服者側の視点から「悲しき夜」と呼ばれるが、メシカ人側に与する視点からは「大勝利の夜」とも呼ばれる。
- 8) 現地語での地名はイシムチェだったが、アルバラード一行の案内人となったのはメキシコ中央部の先住民であった。そのため、彼らの母語であるナワトル語のクアウテマラン Cuauhtemallan という名称で呼ばれた。このクアウテマランがスペイン語でのグアテマラという地名の語源である。
- 9) フエンテス・イ・グスマンは、16世紀の征服者ディアス・デル・カスティージョの玄孫に当たり、グアテマラのレヒドールやトニカパンのアルカルデ・マヨールなどの行政職を歴任した。
- 10) 以下、引用文中における本稿の筆者による補足や省略箇所は、別途注記する場合を除き〔 〕内に示す。
- 11) タラスコ王国は、パツクアロ湖周辺のツインツンツァン、パツクアロ、イファツィオの三都市の連合を基盤とする支配体制であった。スペイン人の上陸時点では、とりわけツインツンツァンが中心的な役割を果たし、現在のミチョアカン州はほぼ全域とその周辺地域を支配していた。スペイン人の到来以前、アステカ王国とは何度も戦闘を繰り返していたが、タラスコ王国の存在により、アステカ支配は西方へと拡大することとはなかった。
- 12) 1550年代にサカテカス銀山が見いだされた後、数十年に及ぶ「チチメカ戦争」によってスペイン人が「平定」に苦勞したのも、メソアメリカ先住民とは異なる生活様式の人々が住む地域であったことがその大きな理由だった。
- 13) ケレタロ Querétaro という地名は、タラスコ語のケレンダロ Queréndaro に由来する。ナワトル語ではトラチコ Tlachco (ゲレロ州タスコの名称と同語源で「球戯場の地」を意味する) と呼ばれていたが、西部経由で北方の征服・入植が進んだこともあり、タラスコ語の名称が採用されたと考えられる。
- 14) とはいえ、現在まで用いられているサンティアゴ・デ・ケレタロの市章は、明らかにこの史料に記された奇跡をデザインしたものである。
- 15) 先住民も時にコンキスタドールだったという観点は、とりわけマシューとオウダイクが2007年に『インディオ征服者——メソアメリカの征服における先住民同盟者』を公開して以降、研究者の注目を集めてきた (Matthew and Oudijk 2007)。

- 16) トーレ・ビジャールによれば、チャルコ、テナンゴ、テボストランなどメキシコ盆地やその近隣、さらにはオアハカのテボスコルーラやトラヒアコなどで集住化を実施したことが知られている (Torre Villar 1995: 13)。
- 17) トラシラカリ tlaxilacalli は、アルテペトル内の「地区」を指す用語で、血縁集団とされるカルブリが定住後に土地を伴った居住地となった場合などは主にこの名称で呼ばれた (Lockhart 1992: 16, 46)。植民地時代の集住化による主邑^{カベセラ}と属邑^{スヘート}の関係性においては、トラシラカリが属邑に該当することも多かった。
- 18) 現在、オアハカ州は570の行政区から成る。行政区の数がメキシコ州では125、ミチョアカン州では113ということを考えると、この数は例外的に多く、個々の村が独立した行政区となっている場合が多いということが見てとられる。
- 19) サアグンによる『キリスト教聖歌集』については、出版されたナワトル語原文からの拙訳を示す。なお、スペイン語からの借用語がナワトル語文中で使用されている箇所は、その語をカタカナで示し、必要に応じて〔 〕内にその意味を付した。
- 20) 死後に聖ヤコブがスペインのパドロンにたどり着いた後、異教の女王ルバ (Lupa) が行く手を阻んだものの、奇跡を目にして改宗したとされる。この女王の名がナワトル語原文ではロバ (Loba) と表記されているが、おそらくこの表記は過剰修正 (ナワトル語に b の音がなく、p で置き換えるのが通例だったため、外来語を表記する際に過剰に修正される現象がよく見られた) と思われる。換言すれば、サアグンが編んだとされる『キリスト教聖歌集』のナワトル語原文には、サアグンの協力者であった先住民が関与した可能性も考え得る。
- 21) 単数形はトラカテコロトル tlacatecōlotl (サアグンの綴り方では tlacateculutl)。
- 22) なお、カンボスは現代的文脈のダムや道路の建設も同じようなものとして言及している。時代の変化による近代的人工物も「人間を取り巻く自然環境」の一部に取り込まれている点が興味深い。表面上は近代的な事象であっても、聖人が生活環境の形成に関与するという意義づけに変わりはないと解釈できるだろう。
- 23) 現メキシコ市グスタボ・A・マデロ区ラ・ビジャのグアダルーベの聖母教会 Basílica de Nuestra Señora de Guadalupe。1531年テペヤクの丘で先住民の聖ファン・ディエゴの前に出現したとされる聖母マリアの信仰は、現在では国民的かつ国際的な信仰を集めている。
- 24) 本引用文については、〔 〕内は引用元の通りで、本稿の筆者による省略箇所は(…)で示す。
- 25) 本引用文については、〔 〕内は引用元の通り。
- 26) 本引用文については、〔 〕内は引用元の通り。

参考文献

(邦文)

アコスタ『新大陸自然文化史 (上)・(下)』増田義郎訳、岩波書店 (大航海時代叢書第

- I 期 3・4), 1966年。
- 井上幸孝「アステカ征服における聖ヤコブ——クロニカの記述を中心に——」『専修人文論集』第105号, 135～159頁, 2019年。
- 小林致広「メヒコ征服の踊り（1）」、『神戸外大論叢』第39巻第3号, 1～27頁, 1988年。
- 「メヒコ征服の踊り（2）」、『神戸外大論叢』第39巻第5号, 9～34頁, 1988年。
- 「メヒコ征服の踊り（3）」、『神戸外大論叢』第40巻第2号, 1～27頁, 1989年。
- 「メヒコ征服の踊り（4）」、『神戸外大論叢』第40巻第4号, 29～58頁, 1989年。
- 「メヒコ征服の踊り（5）」、『神戸外大論叢』第41巻第1号, 3～21頁, 1990年。
- 「メヒコ征服の踊り（6）」、『神戸外大論叢』第41巻第4号, 53～70頁, 1990年。
- 黒田悦子『フィエスタ——中米の祭りと芸能』平凡社, 1988年。
- コルテス, エルナン『コルテス報告書簡』伊藤昌輝訳, 法政大学出版局, 2015年。
- サアグン『神々とのたたかいⅠ』篠原愛人・染田秀藤訳, 岩波書店（アンソロジー新世界の挑戦9）, 1992年。
- 関哲行『前近代スペインのサンティアゴ巡礼——比較巡礼史序説』流通経済大学出版会, 2019年。
- 田辺加恵「『マタモロス聖ヤコブ』像の形成とその戦略的利用」『スペイン史研究』第30号, 18～30頁, 2016年。
- ディーアス・デル・カステイーリョ, バルナール『メキシコ征服記（一）～（三）』小林一宏訳, 岩波書店（大航海時代叢書エクストラ・シリーズⅢ～Ⅴ）, 1986～1987年。
- ロベス・アウスティン, アルフレド『月のうさぎ——メソアメリカの神話学』篠原愛人・北條ゆかり訳, 文化科学高等研究院, 1993年。

（欧文）

- Acosta, Joseph de, *Historia natural y moral de las Indias*. Ed. de Edmundo O'Gorman, México, Fondo de Cultura Económica, 1979 (reimpresión de la segunda edición).
- Anónimo, *Isagoge histórica y apologética de las Indias Occidentales y especial de la Provincia de San Vicente de Chiapas y Guatemala*. Guatemala, Sociedad de Geografía e Historia (Biblioteca “Goathemala”, vol. XIII), 1935.
- Campos Moreno, Araceli, *Lo que de Santiago se sigue contando. Leyendas del apóstol Santiago en México*. Zapopan, El Colegio de Jalisco, 2007.
- Campos, Araceli y Louis Cardaillac, *Indios y cristianos. Cómo en México el Santiago español se hizo indio*. México, El Colegio de Jalisco / Universidad Nacional Autónoma de México / Editorial Itaca, 2007.
- Cardaillac, Louis, *Santiago apóstol. El santo de los dos mundos*. Zapopan, El Colegio de Jalisco, 2002.
- Cortés, Hernán, *Cartas de relación*. Ed. de Manuel Alcalá, México, Porrúa (“Sepan cuan-

tos...” 7), 1994.

Díaz del Castillo, Bernal, *Historia verdadera de la conquista de la Nueva España*. Ed. de Carmelo Sáenz de Santa María, Madrid, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, 1982 (2 vols.).

Domene Verdú, José Fernando, *Las fiestas de moros y cristianos*. San Vicent del Raspeig, Universitat d'Alacant, 2015.

Durán, Diego, *Historia de las Indias de Nueva España e islas de Tierra Firme*. Ed. de Rosa Camelo y José Rubén Romero Galván, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes (Cien de México), 1995 (2 tomos).

Fagetti, Antonella, “El nacimiento de Huitzilopochtli – Santiago: un mito mexica en la tradición oral de San Miguel Acuecomac”, *Cuicuilco*, vol. 10, núm. 29, 2003, pp. 183–195.

Frías, Valentín F., *La conquista de Querétaro. Obra ilustrada con grabados que contiene lo que hasta hoy se ha escrito sobre tan importante acontecimiento, así como Documentos inéditos de bastante interés para la historia de Querétaro*. Querétaro, Imprenta de la Escuela de Artes de Señor San José, 1906.

Fuentes y Guzmán, Francisco Antonio de, *Historia de Guatemala o Recordación florida*. Madrid, Luis Navarro (Biblioteca de los Americanistas), 1882.

García Ugarte, Marta Eugenia, *Querétaro. Historia breve*. México, Fondo de Cultura Económica, 2010 (segunda edición).

Harris, Barry, *Aztecs, Moors and Christians: Festivals of Reconquest in Mexico and Spain*. Austin, University of Texas Press, 2000.

Horcasitas, Fernando, *Teatro náhuatl*. México, Universidad Nacional Autónoma de México, 2004 (segunda edición, 2 tomos).

Lockhart, James, *The Nahuas After the Conquest: A Social and Cultural History of the Indians of Central Mexico, Sixteenth Through Eighteenth Centuries*. Stanford, Stanford University Press, 1992.

López Austin, Alfredo, *Los mitos del tlacuache. Caminos de la mitología mesoamericana*. México, Universidad Nacional Autónoma de México, 1996.

———, “El núcleo duro, la cosmovisión y la tradición mesoamericana”, en Johanna Broda y Félix Báez-Jorge (eds.), *Cosmovisión, ritual e identidad de los pueblos indígenas de México*, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes / Fondo de Cultura Económica, 2001, pp. 47–65.

López de Gómara, Francisco, *Historia de la conquista de México*. Ed. de Jorge Gurriá Lacroix, Caracas, Biblioteca Ayacucho, 1979.

Matthew, Laura E. and Michel R. Oudijk, *Indian Conquistadors: Indigenous Allies in the Conquest of Mesoamerica*. Norman, University of Oklahoma, 2007.

Remesal, Antonio de, *Historia general de las Indias Occidentales y particular de la gober-*

- nación de Chiapa y Guatemala*. Ed. de Carmelo Sáenz de Santa María, México, Porrúa, 1988 (2 tomos).
- Rowe, Erin Kathleen, *Saint and Nation: Santiago, Teresa de Avila, and Plural Identities in Early Modern Spain*. University Park, The Pennsylvania State University Press, 2011.
- Sahagún, Bernardino de, *Psalmodia christiana*. Ed. de José Luis Suárez Roca, León, Instituto Leonés de Cultura, 1999.
- , *Historia general de las cosas de Nueva España*. Ed. de Alfredo López Austin y Josefina García Quintana, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes (Cien de México), 2000 (3 tomos).
- Sell, Barry D. and Louise M. Burkhart (eds.), *Nahuatl Theater*. Norman, University of Oklahoma Press, 2004–2008 (4 vols.).
- Torre Villar, Ernesto de la, *Las congregaciones de los pueblos de indios. Fase terminal: Aprobaciones y rectificaciones*. México, Universidad Nacional Autónoma de México, 1995.
- Valle, Rafael Heliodoro, *Santiago en América*. México, Editorial Santiago, 1946.
- Vázquez de Tapia, Bernardino, *Relación de méritos y servicios del conquistador Bernardino Vázquez de Tapia*. Ed. de Jorge Gurria Lacroix, México, Universidad Nacional Autónoma de México, 1973.
- Warman, Arturo, *La danza de moros y cristianos*. México, Sep/Setentas, 1972.
- Weckmann, Luis, *La herencia medieval de México*. México, Fondo de Cultura Económica, 1994 (segunda edición).
- Wright Carr, David Charles (ed.), *Origen de la santísima cruz de milagros de la ciudad de Querétaro*. Madrid, Iberoamericana-Vervuert, 2017.